OD EATER BURST　-Is he Man, God or Monster?-

究極の混沌　feat.Tartle

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　ＢＵＲＳＴ　－Ｉｓ　ｈｅ　Ｍａｎ，　Ｇｏｄ　ｏｒ　Ｍｏｎｓｔｅｒ？－

【Ｎコード】

Ｎ６９１９Ｗ

【作者名】

究極の混沌　ｆｅａｔ．Ｔａｒｔｌｅ

【あらすじ】

雨宮キキョウは、ツバキの弟でリンドウの兄。だが彼は、窮地のリンドウを逃がすために自ら囮になり、大破した腕輪ととてつもない悲しみを残して消息を絶った。そして何年も後に、再び彼は姉と弟に巡り会うこととなる。人ならざるものに変貌して……。彼は、神を喰らいし堕ちた者は、無事元の人間の姿に戻れるのか、本能のまま戦う野獣になりさがるのか、それとも……　彼の成れの果てがどうなるのか、それは誰も知らない。彼自身すらも――。　奇

想天外！！　予測不能！！　豪華絢爛！？　究極の混沌とＴａｒｔｌｅがタッグを組んで送る、ハイテンション長編アクション小説！！

第1話　花の名を持つ姉弟達

時は２０６４年。所は【贖罪の街】こと旧東京。
２人のゴッドイーターが、今まさに金属的な外見で蠍型の大型アラガミ――ボルグ・カムランを討伐し終えたところだった。
「ふ～、終わったな兄上。今回は強敵だったな。」
「あぁ」
「兄上」と呼ばれた方――雨宮キキョウが、顔に微笑みを浮かべる。
左目には、片眼鏡のように眼窩にはめ込まれた赤い眼帯のようなものがある。
隣にいるのは、ゴッドイーター就任3年目である弟の雨宮リンドウ。
どちらも、整った顔立ちに黒髪で、名前には花の名が冠されている。
「さて、これでミッションも終わったし極東支部に帰…」
そう言いかけた矢先、キキョウは驚きで一瞬その場を動けなかった。
「ん？　どうしたんだ、兄上」
「まずいな…」
そこには、鬼の頭のような大きな尻尾を持つ白い二足歩行の小型アラガミ――オウガテイルがいた。
ただ、いつもと違うのはその数。2，3体どころか、少なく見積もっても１０体以上はいる。２人だけで勝てるかは怪しい。
「リンドウ、おれがあいつらを引きつける。その間におまえは極東支部に戻れ！」
覚悟を決めた顔で、キキョウがリンドウに言う。
「でもっ…それじゃあ兄上は…」
心配そうな顔をして反論するリンドウ。ただでさえキキョウは遠距離式神機を使っているのに、この数は流石にきついだろう。
それでもキキョウは彼に向き直り、笑顔でこう言った。
「ま、何とかなるさ」

兄の決意を無駄にしないために、リンドウは行きに2人で乗ってきたジープで急いで極東支部に戻り、この事を報告した。
自分の弟の危機に、姉である雨宮ツバキも焦っていた。すぐに援軍が派遣され、リンドウとツバキはその先頭に立って現場へ向かった。
だが、そこにキキョウの姿は無かった。
別れた場所から少し離れた所に、すでに崩れ始めている十幾つものオウガテイルの死体が残っていた。そしてその奥には……何という事だろう、虎(とら)のような姿の大型アラガミ――ヴァジュラの死体があった。息絶えてから、まだ長くはない。
とにかく、雨宮姉弟と援軍は全員で手分けしてキキョウを捜索した。しかし見つからなかった。
最悪の証拠――爪による攻撃で大破した兄の「腕輪」こと「P53アームドインプラント」を残して。
「俺のせいだ…俺があの時残って一緒に戦っていれば…！」
リンドウは、激しく自責の念に駆られた。
「過ぎた事だ…もうどうしようもない」
後ろから聞こえた声に振り向くと、ツバキがいた。
弟が死んだんだ！！　なぜそんなに冷淡でいられるんだよ！？
そう反論しようと思ったリンドウだが、ツバキの様子を見てやめた。
血が出んばかりに拳(こぶし)が握りしめられていて、目の周りが赤くなっていた。
ツバキは平然とした顔だが、その目には悲しみが写っていた。

それから7年。ツバキは数年前に引退して「鬼教官」と恐れられる教官になり、リンドウもすっかりベテランの1人に数えられるようになった。
そんな彼は今、新人を教育すべく【贖罪の街】へ来ていた。
廃墟(はいきょ)の中、リンドウは新人ゴッドイーターがオウガテイル1体を倒

し終えるのを、しっかりと見届けた。
「リンドウさん」
新人が満足げな顔で駆け寄ってくる。
「お、終わったか。核は摘出したな？」
「もちろんですよ。早く帰りたいですから」
「ははっ、頼もしいな！　それじゃ、帰るとするか。気を抜くなよ、アナグラに帰るまでがミッションだからな」
笑いながら帰ろうとした2人。
だが次の瞬間、後ろから大きな雄叫びが聞こえた。そしてそこには…
「おいおい…冗談じゃないぜ…」
そのアラガミはボルグ・カムランに似ているが、色々な所が違う。
漆黒の兜を思わせる頭部と、それと対になるかのような装甲。
捕喰形態の神機そっくりの形で、独特の光沢を持った大きな前腕部。
僅かに帯電し、雄々しく靡く薄紫色の鬣。
すらりと長く伸びた黒い尾と、その先端に付いた長大な剣。
そう、第一種接触禁忌アラガミの1体、スサノオだ。

『不測の事態』とは、まさにこの事だろう。
「チッ…新入り、俺があいつを引きつける。その間に極東支部に戻れ！」
「えっ！？　リンドウさんはどうするんですか！？」
ふと、リンドウはある事を思う。
この展開って、前にもあったな。俺も兄上と同じ目に合うのだろうか。と。
「いいから早く…」
最悪の未来予想図を振り切って続けるリンドウだが、スサノオが攻撃してきた。
話の間くらい待っててくれよ。リンドウはそう独り言ちた。
「くそっ…このままじゃ共倒れだ…！！」
新人だけでも助けたい。そう願うリンドウ。

と、その時だ。
スサノオとは全く違う雄叫びが聞こえた。
見ると、廃墟のてっぺんに西洋の竜みたいな姿のアラガミがいた。
黒い体に所々赤い線が入り、両腕は白い籠手になっている。
（こりゃあ、だめかもしんねえな）
流石のリンドウも観念した。２体を一気に相手なんて無理にも程がある。そう思ったからだ。
しかしだ。彼らの想像は、良い意味で裏切られた。
謎のアラガミが廃墟から飛び上がったかと思うと、次の瞬間には右手首から突き出した剣でスサノオの背中を貫いていた。
何と、リンドウと新人ではなくスサノオに攻撃したのだ。
スサノオは苦痛の叫びをあげながら、腕で謎のアラガミに喰らいつこうとする。だが謎のアラガミはそれを難無く躱すだけでなく、左手で殴って粉砕した。
片腕になったにも拘らず、スサノオは攻撃を続けるのだが、全く当たらない。いや、それどころかその度にカウンターを受けている。
自棄っぱちになって尻尾を振り回すスサノオだが、謎のアラガミが使う右手首の剣で瞬時に斬り落とされた。
バッサリと切断されたスサノオの尻尾が、リンドウと新人の目の前に落ちる。
謎のアラガミの手首から出ている炎のような風貌の青白い剣は、どんどん形をかえて槍の形になった。そして、核があるであろう場所を貫いた。
「な…何なんですか…？」
新人が恐る恐る訊く。
「俺も分かんねえよ。こんな奴見たことねえ。新種か…？」
結果は、謎のアラガミの圧勝だった。それは、まだ息があるスサノオの反撃をすべて避け、青白い槍で何度も突いてスサノオを殺した。
そして謎のアラガミは、リンドウと新人がいる前で、スサノオをガツガツと食べ始めた。うっすら輝く紫色の筋肉から、鮮血が垂れる。

スサノオの骨格はボルグ・カムランによく似ているが、装甲はそこまで硬くはなく、むしろ柔らかい部類に入っている。
さて、謎のアラガミはスサノオを食べ終えた後に、リンドウと新人に向き直った。
万事休すか。
そう思った2人だが、またしても信じられない事が起こった。
「…リ…ン…ド…ウ……」
「なっ…！？」
謎のアラガミがしゃべった。しかも、リンドウの名を呼んだ。
そして、謎のアラガミはどこかに去って行った。

極東支部へ帰るジープの中、リンドウと新人は謎のアラガミについて話していた。
「それにしても、変わったアラガミでしたね」
「ああ、俺達の事を襲わなかったしな」
「いえ、それだけじゃないです」
「？　何なんだ？」
自分達を襲わなかった事以外に何が変わっているのか。気になったリンドウは問い質(ただ)す。
「ボロボロでしたけど、左目に赤いアイパッチがはめ込んであったんですよ」
「何…！？　本当か！？」
「小さい頃から視力はいいんです。見間違えようがありませんよ」
赤いアイパッチ…俺の名前……
まさかな……
リンドウはあるはずの無い事を想像しながら、極東支部に帰っていった。
誰しも、リンドウの予想が当たっているとは夢にも思っていなかっただろう。

―続く―

第1話　花の名を持つ姉弟達（後書き）

（注）雨宮キキョウはあくまでオリジナルキャラクターであり、ゲーム本編には存在しません。

第2話　花言葉は「気品」

リンドウと謎のアラガミの遭遇から7年前、キキョウはオウガティルの大群と対峙していた。
危機的状況のはずなのに、キキョウの顔には余裕の笑みが浮かんでいる。
「さぁて、ついにこれを使う時が来た…！」
そう言って取り出したのは、スプレー缶のような形の物体。
「ピー…何だっけな…？　こいつを使えば、テストにもなって一石二鳥だ！」
ＰＧ－１－Ｐｒｏｔ「試作型挑発手榴弾」は、特定のアラガミが好む偏食因子が液体状になって詰め込まれている手榴弾で、これをどこかに投げて中身を噴霧させる事で、そのアラガミの注意をそちらに向けるのだ。
なぜキキョウが持っているかと言うと、極東支部の技術開発統括責任者であるペイラー榊博士が「試作品ができたから、テストしてきて」と無理やり持たせたからだ。
「さぁ、食らいついてくれよ…！！」
そう呟きながら、キキョウはオウガティル専用挑発手榴弾の側面にある安全レバーを握りながら、安全ピンを抜こうとする。
しかし、抜けない。何度引っ張っても。
キキョウは頭に来て、渾身の力を振り絞って力いっぱい安全ピンを引っこ抜いた。
だが、引っこ抜いた勢いで安全レバーも離してしまった。
その後は、読者の予想通り。中身はすべてキキョウの体に噴霧されてしまった。寝癖だらけの髪の毛からアーミーブーツを履いた足先まで、偏食因子の液体でびっしょりだ。余談だが、これが爆薬入りの手榴弾だったら無事では済まない。破片で体中を貫かれ、確実に死んでいる。

オウガテイルはというと、さっきよりますます興奮しているようだ。
涎を垂らしたり舌なめずりしたりしている。
「えええええ！？！？　嘘おおおおお！？！？」
命懸けの鬼ごっこが始まった。
逃げる側は１人、追う側は１０体以上。
キキョウは、かつて大通りだった道を必死で逃げる。１０ｍほど後にオウガテイルの大群が続く。
勝負は一方的に見えた。が…
「…なーんてな！」
突然キキョウが足を止め、振り返った。愛用の神機――遠距離式の神機「アメノカゴユミ」を構えている。
そして、次の瞬間には砲撃を始めた。オウガテイル達の顔面に１発、また１発と、砲弾が叩き込まれる。
「アメノカゴユミ」は、「エクセプショナルタイプ」と呼ばれる神機。
アサルトの高い連射性能とブラストの強大な威力、スナイパーの長い射程距離を併せ持つ、規格外の試作品だ。
持ち手の前に付けられている防盾は、かつて対戦車用に使われていた速射砲を模っているのだ。
休み無く撃っているが、１撃ごとに的確にオウガテイルを仕留めている。
キキョウの実力が片鱗を現した瞬間だった。

１５発分のエネルギーカートリッジが、空になった。
硝煙の匂いと生肉が焼け焦げた匂いが混ざり合わさって、キキョウの鼻を突く。
オウガテイルの大群がいた場所は爆煙でよく見えないが、あらかた討伐できただろう。キキョウはそう思って、しかし念には念を入れて、「アメノカゴユミ」のエネルギーカートリッジを入れ替えようと薬室を開いた。

だが、考えが甘かった。
黒い煙を割って、1体のオウガテイルが飛びかかってきた。
しかも、それだけでは終わらなかった。
キキョウが背にしていた廃墟を飛び越えて、ヴァジュラが現れたのだ。
『前門の虎、後門の狼』、いや、この場合は『前のオウガテイル、後ろのヴァジュラ』の方が合ってるだろうか。実際、後者のような諺は存在しないが。
しかし、この後の展開は、キキョウが予想していたそれとは少し違った。
ヴァジュラはオウガテイルの首根っこに食らいつき、首を噛み切って殺した。そして食べた。でも、周りにあるオウガテイルの死体には見向きもしない。
オウガテイルが主に他のアラガミの死骸などを捕喰するのに対し、ヴァジュラは普通に生きている相手を自らが仕留めて食べるのだ。
さて、キキョウは考えあぐねていた。
このまま隙をついて攻撃すべきか。だが、エネルギーカートリッジはさっき使い切って、まだ入れ替えていない。入れ替えている間に襲われたら最後だ。どうしよう。と。
だが、もう考えてる場合じゃなくなった。
ヴァジュラがこちらに気づいたのだ。飛びかかる態勢になろうとしている。キキョウは咄嗟に青紫色のフェンリル武装制服の上着に付けたポーチからスタングレネードを取り出して、安全レバーを押さえながら安全ピンを引き抜いて、ヴァジュラの足元に投げた。3秒後、スタングレネードが炸裂し、大きな爆発音と眩い閃光がヴァジュラを襲う。
スタングレネードは殺傷力を持たないが、閃光と大きな音で相手の感覚を一時的に麻痺させる。
ヴァジュラが混乱している隙に、キキョウは逃げて身を隠した。

（特に意味は無いけど、何となくキキョウ視点から）

おれ達姉弟は、３つの命令を常に肝に銘じている。
死ぬな。
死にそうになったら逃げろ。んで、隠れろ。
運が良ければ、不意を突いてぶっ殺せ。
おっと、これじゃ４つか。
とにかく、これさえ守れば万事どうにでもなる。『命あっての物種』ってやつだろうか。
このご時世、自分や仲間よりつまらないプライドを大事にしてたら、命がいくつあっても足りない。プライドを捨ててでも、命を優先するものだ。
さて、おれは今ヴァジュラから逃れてコンクリート壁の陰に隠れている。余力はともかく、何としてもあのヴァジュラは仕留めたい。
俺の意地がそうさせる。
あれ？　これじゃ、さっきのと矛盾してるような……まぁ、いいか。
ともかく、しばらく考え続けた結果、俺は１つの作戦を思いついた。
一か八かだが、ヴァジュラを捕喰してアラガミバレットを入手し、反撃の隙も与えず息の根を止めよう。
と、地響きが立つのが伝わってきた。
顔を出して見ると、さっきのヴァジュラが少し離れた所をのしのしと歩き過ぎて行っている。
おれはすぐさま、近くにあった手頃な大きさの瓦礫を手に取って、明後日の方向に投げる。カツンと音が鳴る。
ヴァジュラが反応して、その方向に歩み寄る。ここまでは作戦通りだが、勝敗の分かれ目はここからだ。
神機を捕喰形態にしながら、おれはヴァジュラに向かって突進する。
そして…
成功だ。
ヴァジュラの右前足を丸々１本もらった。大雷球が３発手に入った。

だがここで、致命的（ちめいてき）な事態が起こった。
ヴァジュラが怒（いか）り狂（くる）って振り回した左前足の爪（つめ）で、おれの右手首にあった赤い「腕輪」——正式名称（せいしきめいしょう）は忘れたけど——がぶった斬られたのだ。
4つに分断された「腕輪」が足元に落ち、右手首にも4本の切り傷が付いた。これ以上当たっちゃダメだと思ったおれは、バックステップで逃げる。
ヴァジュラが、鋭（するど）い牙（きば）と闘志（とうし）を剥（む）き出しにして吶喊（とっかん）してくる。ここでヘマしたら、もう後が無い。だが、肉を斬らせてでも骨を断つ。
激痛に耐えて「アメノカゴユミ」の銃口を向ける。装填（そうてん）されているのは、大雷球3発。
この世を去るのは、どっちだ。

数秒後、ヴァジュラは左肩（ひだりかた）と下顎（したあご）と鳩尾（みぞおち）を破砕（はさい）されて、息絶えた。
しかし、おれの右腕が何か変だ。神機から「腕輪」に繋（つな）がっていたはずの触手っぽいものが、右手に巻き付いたり右手首の傷に入ってきたりしていて、右手中心に表皮が変色し始めている。
ヤバい。意識が朦朧（もうろう）としてきた。早く極東支部（アナグラ）に帰ろう。
そう思って歩き出したが、突然足場の感覚が無くなった。なぜか、足元には直径数mの穴がぽっかりと開いていた。おれの左足が、胴体が、そして「アメノカゴユミ」が、否応（いやおう）無く重力に引っ張られて落ちていく。
さようなら、この世。こんにちは、あの世。
おれが気を失ったのは、どの辺だろうか。

――――――――――――――――――

（第三者視点に戻しま〜す）

キキョウが目覚めると、周りは真っ暗だった。

「何なんだ…？　ここは…」
そう呟くのとほぼ同時に、何かが現れた。神機の顎にそっくりだ。
「アマミヤキキョウ…」
「誰だ…！？　なぜおれの名を知っている…！？」
「愚問よのう。ワシはオマエの神機「アメノカゴユミ」だよ」
これは夢だ。確実に夢だ。キキョウはそう思う。実際のところ、筆者からしても微妙なのだが。
「アラガミって、美味いか？」
「お世辞にも美味ではないが…いや、それよりだ」
ついつい脱線してしまい、慌てて話を戻すアメノカゴユミ。だが、その口から出た言葉はかなり衝撃的なものだった。
「単刀直入に言おう。オマエはアラガミになるのだ」
どこからか、グチャグチャと小さいながらも不快な音が聞こえてくる。
「えーっと…まず訊こう。それとおまえと、何の関係が？」
「何って、ワシがオマエの体をもらうんだよ」
「は！？」
アメノカゴユミ本人（人か？）によると、自分は「「P53偏食因子」という箍が外れたのがきっかけで自我が芽生えたアーティフィシャルCNS」だそうだ。ちなみに「アーティフィシャルCNS」とは、神機に使われている人工の核だ。
「そういうわけで、体よこせ」
「どういうわけだ！？　というか、これはおれの体だ！！　おまえにくれてやる気は無い！！」
「そうかね。ならば力ずくで…」
まずい。大いにまずい。このままでは「雨宮キキョウ」という人格が抹消されてしまう。連載2話目でもうバッドエンドになってしまう。
何とかしなければと必死で解決策を考えるキキョウの頭に、ある1つの事が浮かんだ。

「そういやさ、神機って使い手がいなきゃ機能しないよな？」
「それがどうし…まっ…まさかっ…！？」
「その「まさか」だよ。おまえだって、おれがいなきゃ空弾（くうだん）1発撃てないのさ！！」
「しまったぁ！！　オマエを消したら、ワシは攻撃できないのか！！」
予想外の事実（？）に気づき、焦るアメノカゴユミ。そして、キキョウは自分の要求を通せた。
「というわけで、体のコントロールはおれに任せてくれるか？」
「むぅ…仕方無い…だが、いずれワシが乗っ取ってやるからな！！」
声がどんどん遠ざかり、視界がぼやけていく。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

目を覚ました時、キキョウの右目に天井に開いた穴とそこから見える晴天が飛び込んできた。
そっか、おれ生きてたのか。特にわけも無く、キキョウは手を伸ばした。いや、伸ばそうとした。
途中で、天井にぶつかった。
――あれ？
おれの手って、こんなにゴツかったっけ？
おれの指って、こんなに鋭い爪あったっけ？
おれの体って、こんなにデカかったっけ？
おれって……人間だよな？
よく分からない人のために、簡単に言おう。
キキョウは、本当にアラガミになってしまったのだ。
しかし、雨宮キキョウとしての意識や記憶もちゃんとある。おそらく、キキョウが夢（？）の中でアメノカゴユミを説得できたおかげで、オラクル細胞の侵蝕（しんしょく）を止められたのだろう。
見たところ、ここは地下鉄の駅だった所のようだ。プラットホーム

が、アラガミ化したキキョウの重みで潰れている。右肩のあたりに鏡を見つけたので、それで顔を見る。
どう見ても人間じゃない。しかし、赤い眼帯は相変わらずはめ込まれている。無理やりっぽいが、大人しく納得してくれ。
それはそうと、ひどく腹が減る。体が、ほとんどはオラクル細胞が、食べ物を欲している。ここに人間の食べ物は無いだろう。ハイヴの外に暮らす人が分捕ったか、とっくに朽ち果てたかは知らない。
とにかく、人間が食べれそうな物は何1つ無い。
そう、人間が食べれそうな物は…
一口目を食べて思った。確かに、とても人間が食えた物じゃないと。アラガミ化したキキョウは、飢えを凌ぐために鉄筋コンクリートを喰っていた。
いやはや、アラガミってすごいな。人間が食べれない物でもゴリゴリ食べれるから。それにしても、砂とか石とかってこんな味なんだな。「血は鉄の味がする」って言うけど、鉄ってこんな味なのか。血の中の赤血球に鉄分があるから、鉄の味がするんだっけ。
アラガミ化したキキョウはそう思いながら、5枚目の鉄筋コンクリートの床板を食べ始めた。
というか、そろそろアラガミとしての名前を決めてくれ。こっちもいちいち「アラガミ化したキキョウ」って書くのめんどくさいんだよ。
「ん？　誰かいるのか？」
いるよいるよ。ずっと君を見守ってる俺が。
「誰だ？」
語り手だよ。ナレーターとも言う。
いやそれより、さっさとアラガミとしての名前を決めろ。
「たく…しょうがねえな…」
アラガミ化した（略）は、ようやく考え始めた。
「ちょっと待て。勝手に略すな」

早く決めないとさらに略しちゃうよ？　アラガミ化（略）くん？
「待て待て！　それ以上略したら完全にアラガミになっちゃう気が…」
これで確定しちゃうよ？　１０…９…８…
「そうだ！！　「オーディン」とかどうだ！？　おれと同じ片目だから…」
おっ？　いいね！　かっこいいし強そうだし、採用！！
斯(か)くして、アラガミ化したキキョウの名前はオーディンに決定したのであった。
「食い足りねえ…」

さて、地下鉄のホームだけでは狭かったので、オーディンは土台やその下の土やら石やらを食べて広い空間を作った。
アラガミ化したからか、背中なども顎に変形できるようになっている。それを使って、仰向(あおむ)けのまま掘り下げたのだ。駅に繋がっていたトンネルは、瓦礫を積み上げて塞(ふさ)いだ。
穴からは、うっすらと月明かりが入ってくる。顎を出し続けた疲れと鉄コンとか土とかを大量に食べた満腹感から、キキョウに眠気が差してきた。土の上に蹲(うずくま)り、すぐさま寝息(ねいき)を立て始めた。
土の上はほんのり暖かく、予想以上にふかふかで、母親の腕で優しく包み込まれている感覚を連想させられたそうだ。

―続く―

第2話　花言葉は「気品」（後書き）

（注）雨宮キキョウはあくまでオリジナルキャラクターであり、ゲーム本編には存在しません。あと、「アメノカゴユミ」やオーディンもまた然りです。

P．S．：次回、ソーマの迷台詞で有名になってしまったあの男が、まさかのゲスト出演＆大（？）活躍！！

第3話　男神と女神と御曹司と

キキョウが、自らオーディンと命名したアラガミになってから、6年以上が経った。
地下鉄の駅の跡地から土を掘り、出入り口を作った。たまたま、赤いレンガでできた廃墟の下に作れた。で、そこから出てこまめに運動する。体が鈍ったら、いざという時に困る。
そんなある日、キキョウの身に珍事件が起こった。
その前日にオーディンは、疲れたあまり赤レンガの廃墟で眠ってしまったのだ。
そして翌日。
「♪～」
『はぁ…不幸だ…』
キキョウが呟く（人の声ではないが）。
しかし、今の彼の状況を見てこれが不幸と賛同してくれる者はどのくらいいるだろうか？
きっと、男性１００人に問えば１００人とも賛同しないであろう。
むしろ、この状況を「不幸だ」と言うキキョウは、間違いなく袋叩きにされるだろう。
何が起こっているかって？
ひとまず状況を整理してみよう。

・キキョウが朝起きたら左腕に何かが抱きついていた
・左腕の籠手の裏の屈指筋あたりに齧り跡があった
・よく見ると抱きついているのは黒いサリエルだった
・割と豊満な胸で左腕を挟んでいる

以上、状況整理終了。
な？　男にとっては夢みたいな事だと思…

オホン！！　さて、その間キキョウは考え込んでいた。
このサリエルは、おれの肉を食べてああなったのか？　というか、なぜこの状況に？　そもそも黒いサリエルとか見たことない。あっ、もしや、おれの肉を食べて突然変異したのか？
などと。
「？」
ふと、黒いサリエルが首を傾けて、左肩に頭を乗せる。
必死で平静を装っていたキキョウにとっては、追い打ちをかけられたようなものだ。
やめろーーー！！　肩に頭を乗せるなーーー！！　俺の理性がぁぁぁぁぁ！！

キキョウは、息も絶え絶えになっている。
ようやく、黒いサリエルをうまく撒いて逃げ切ったのだ。
キキョウは、女性と付き合った事が無い。だから、いきなり美女（実際は人じゃないが）に抱きつかれて、混乱のあまり逃げ出したのだろう。
それにしても、腹が減る。アラガミになった事で1回の空腹が大きくなったのだ。
ふと、気配を感じ取る。アラガミだ。数は１０体前後。いや、それだけじゃない。人間も2人いる。しかもゴッドイーター。
狩られちゃ堪らないが、腹が減っているから何か食べたい。アラガミを探して動き始めるオーディンは、大きな廃屋の1つに目をやる。
赤い服を着た赤毛の青年が入っていく。だが、よく見るとオウガテイルも入っていっている。それも、1体だけではない。
これはヤバい。そう思ったキキョウは、廃屋に駆け寄る。
「アラガミいないな～……さては、僕の華麗なる攻撃が怖くて逃げたんだな？」

赤毛の青年は、呑気にそう言っている。しかしオウガテイルは、牙を剥き舌なめずりしている。
見たところ、１０体はいる。このままじゃ、赤毛の青年は確実に死ぬ。見かねたキキョウは決意した。赤毛の青年を助けると。
オウガテイルが飛びかかる。しかし、オーディンが横から突き飛ばして頭を喰った。他の場所からオウガテイルが食らいつこうと飛びかかるが、オーディンが右手首から発動した赤色のブレードで真っ二つになった。すかさず、別の場所から別のオウガテイルが飛びかかる。今度は左足首から緑色のランスを発動して、蹴るような感じで串刺しにした。そして、左足を下ろすついでにメイスを発動して小柄なオウガテイルを叩き落とし気絶させた。
言い忘れたが、手首や足首から炎のような風貌の武器を発動するこの技は、キキョウ本人が「カオスアームズ」と命名した。４属性いずれかの武器を発動する技だ。
飛びかかろうとしているオウガテイルを左側に見つけ、左腕を速射砲に変形して雷属性の砲弾を撃って粉砕する。
腕を速射砲に変形するこの技は、キキョウ本人が「エレメントガン」と命名した。４ついずれかの属性の砲弾を撃つ技だ。形状や性能は、人間だった時の愛用神機「アメノカゴユミ」と同一だ。
ちなみに４属性の色だが、炎は赤色、氷は水色、雷は緑色、神は金色になる。完全に筆者の想像だ。悪いか。
と、説明している間に、オーディンはオウガテイルを殲滅していた。本当に１０体ジャストだった。
「いや～、君の華麗な動きに助けられたよ。この恩は一生忘れないだろう」
唖然として見ていた赤毛赤服の青年が、お礼を言う。若干鼻につく口調なのが、気に障るが。
「僕はエリック、エリック・デア＝フォーゲルヴァイデ。誰もが認める極東ナンバーワンの神機使いさ。アラガミ、君の名前は？」
訊かれて、オーディンはまだしゃべれない事に気づく。

辺りを見渡し、炭になった長い棒切れを見つけて持ち、それで床のタイルに文字を書いた。
『オーディン』
「オーディンだって！？　北欧神話の最高神と同姓同名じゃないか！！　なんと素晴らしい！！」
姓はともかく、名は同じだ。むしろ、キキョウが似せたのだ。
そういえば、「フォーゲルヴァイデ」の苗字は聞いた事がある。確か、フォーゲルヴァイデ財閥とかいう、フェンリルの傘下企業があったような、とキキョウは思い返す。
『さて、御曹司様がこの極東に何の御用で？』
オーディンが、皮肉も込めた質問を返す。
「だって、今や極東が対アラガミ戦線の花形じゃないか」
エリックが、少し笑って答える。しかし、顔にいくらか陰りがある。
『それだけじゃないんだろ？』
「……フッ、やっぱり君は勘が鋭いんだね」
観念したかのように首を振って、話し始めた。
「僕には妹がいる。エリナといってね、綺麗な緑がかった銀色の髪の、かわいらしい子だ……」
途中途中で（ほとんどが自慢により）話が逸れたので、こちらで簡単にまとめよう。

・エリックにはエリナという妹がいる
・病弱なエリナは咳の発作が出るため、欧州より空気がいいという極東の叔母の所に移り住んでいる
・エリナからの手紙を読んで寂しさなどを読み取った
・愛しの妹を心配したエリックは神機使いに志願
・2年の欧州での戦いを経てようやく極東に来れた

遠くから戦闘音が聞こえる。誰が戦っているんだろうか。
『いい話じゃないか』

「だろ？　だからね、僕はこんな所で死ぬわけにはいかないのさ。ま、それ以前に僕は死なないよ！！　華麗だからね！！　ハッハッハッハッハ！！」
満足げに高笑いするエリック。と、突然優雅そうなクラシック音楽が聞こえ始めた。
「…おっと、ごめんよ」
携帯端末を手に取る。さっきのクラシック音楽は、どうやら着メロだったようだ。
「ソーマか。どうしたんだい？」
「エリック、どこで油売ってんだ？」
「やぁ、ごめんごめん。道に迷っちゃってね」
「ったく…気をつけろ」
オーディンはアラガミ特有の人並み以上の聴力（ちょうりょく）を駆使して、携帯端末のスピーカーから漏れ出る声を聴く。低く、少し不機嫌そうな声が聞こえる。通信を送る彼こそが、ソーマ・シックザールである。
「今そっちに向かう。ウロウロするなよ」
「あぁ、うん……」
返事を待たず、通信は切られた。
それはそうと、大いにまずい事になった。このままではオーディンが殺されてしまう。ソーマほどの腕前のが来たら、さしものオーディンでも勝てるはずがない。
『どうする気だ？　おまえも共闘しておれを殺す気か？』
「何、このエリック・デア＝フォーデルヴァイデ、受けた恩は必ずや恩で返すさ！」
微笑みを浮かべて言うエリック。それを見たキキョウは決めた。彼を信じようと。
『だが、素顔で行ったらバレるだろ』
「ふむ…言われてみればそうだな…」
どうしたものか。
ふと顔を上げた2人（？）の目線の先には、虫の息になった小柄な

オウガテイルが横たわっていた。

「ったく…世話焼かせんなクソったれが……」
ソーマは携帯端末でエリックの『腕輪』の発信機の位置を確かめ、悪態を吐きながら向かっていた。
しばらく行くと、大きな廃屋が暗い入り口を開いていた。ここか。
そう呟いたソーマが、廃屋に足を踏み入れようとした、その時だ。
「待てい！！」
ソーマの前に人影が現れた。頭に小さめのオウガテイルの頭蓋骨を被っている。
「僕の名は「マスク・ド・オウガ」！　華麗なる流離の火砲使いだ！！」
どこぞの特撮ヒーローっぽい決めポーズをとるマスク・ド・オウガ。だが、ソーマには正体はすぐ分かった。あの印象的な服装で。
「…何やってんだ、エリック」
「ちっがーう！！　おいどんは「マスク・ド・オウガ」だ！！」
「おいどん？」
さっきと1人称が違うのを不思議に思い、ソーマは首を傾げる。マスク・ド・オウガは慌てて本題を言った。
「とっ…とにかく、このおらっぴがいる限り、ここは通さんヌッツォ！！」
「キャラぐらい事前に決めろ」
どんだけキャラ不安定なんだよ。ソーマもすでに呆れている。
「この先に行きたきゃ、わっちを倒してから行けヌッツォツォ！！」
それでも、マスク・ド・オウガは1歩も退かない。ソーマはとうとう、溜め息を1つ吐いてからこう言った。
「…何だか知らんが、上等だ。全力で叩っ斬る」
「おう！！　かかってこ…えぇ！？　ちょっ、ちょっと待った…」
マスク・ド・オウガが止めるのも聞かず、ソーマが赤黒い鋸形の刃
「イーブルワン」で斬りかかってくる。本気で振り下ろされた一撃

を、マスク・ド…あぁ、もうめんどくせぇ！！　…エリックはスレスレで避ける。
（待った待った待った！！　いくら何でも殺す気で来ないでくれたまえ！！）
「どうした？　その程度か？」
そう言いながら、尚も斬りつけるソーマ。このままでは確実にやられる。
（ごめんね、エリナ…お兄ちゃん、もうダメかも……）
愛する妹を思い浮かべたエリック。それと同時に、あの誓いも思い出した。
「愛しの妹のためにも、ここで醜く終わるわけにはいかんでごわすナリ！！」
「…やっぱお前だろ、エリック」
「問答無用！！」
愛する者を想うと、俄然力が湧いてきた。そう感じたエリックは、勢いよく反撃に転じた。
「華麗なる僕の華麗なる伝説は、まだ始まったばかりさ…！！」
エリックは言うや否や突進し始め、手にした２０型ガットをぶっ放す。近距離で放たれた一撃だが、ソーマは紙一重で避けた。
「やっ…野郎っ…！」
ソーマが「イーブルワン」を横一閃するも、エリックは飛び跳ねて避け、次弾装填が終わった２０型ガットを撃つ。ソーマは咄嗟に、タワーシールド「リジェクター」を展開して防ぐ。
「ハッハッハッハッハ！！　さっきの勢いはどうしたのだニョ？」
「チッ…面倒な奴だ…！」
アクロバティックに飛び回りながらも、一撃一撃を的確に撃ち込む。『蝶のように舞い、蜂のように刺す』。その言葉が似合う戦い方だ。まぁともかく、戦いは意外とエリックが有利に進んでいる。油断さえしなければ、結構強いのだ。
（もっ…もしかして勝てそう…！？）

ついにソーマに勝てる！！　そう確信したエリックは、ノリにノって一気に畳み掛ける。
「華麗なる…エリックシュート！！」
おいおい、自分から正体バラしてどうする。本人は高ぶっているので気づいてないようだが。ともかく、そう叫びながら自作の必殺弾を上から撃ち込む。
だが、ソーマは紙一重で避け、神機を振りかぶったまましばらく動きを止めた。この構えは……
「食らえ！！」
黒いオーラを纏った強力無比な縦一閃――チャージクラッシュが放たれた！！　エリックはどうにか避けれたが、被っていたオウガテイルの頭蓋骨の右側に深々と切り傷がついてしまった。
反撃しようとするエリックだが、ある異変に気づいた。何と、頭蓋骨が徐々にボロボロと崩れ始めている。チャージクラッシュがきっかけで結合に綻びが生じ始めたのだ。
「ハッハッハッハッハ！！　えーっと…アレだ。そろそろお腹がすいてきたから、今日はこのへんにしといてやろうぞ！　それではいざさらば！！　Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ！！」
焦ったエリックは、半ば捨て台詞的にそう言って去って行った。
何しに来たんだ、とソーマはしばらく呆気にとられていたが、ようやく廃屋に足を踏み入れた。しばらく進むと、赤毛で赤い服を着た青年――エリックが俯せに倒れていた。念のため、ソーマは「イーブルワン」の先で肩辺りを小突く。
「おい、エリック」
「！？　…いっ…今自分で起き上がるところだったんだ！！　本当だよ！？」
「だろうな。さっきまで元気そうに動き回ってたからな」
あーあ、墓穴掘っちゃったよ。見栄なんか張るからだ。様ぁ見ろ。
さて、ソーマがふと顔を上げると、近くにすでに崩れ始めている幾つかのオウガテイルの死体が残っている事に気づいた。

「…これ…どうしたんだ…？」
「あぁ、こいつらか。僕に襲いかかって来たんだけど、こてんぱんにやっつけたんだよ。言うまでもないが、僕の手柄さ。さぁソーマ、さっさと『アナグラ』へ帰ろう！　ハッハッハッハッハ！！」
少し無理やりだったが、ソーマも納得したようだ。ふぅ、危なかった。
「おい語り手、何か知ってんなら話せ」
なーんの事かなー？　お兄さん知ーらない。ピュッピュピュー♪

数分後、2人は輸送ヘリでアナグラへの帰路についていた。
エリックは、胡散臭ささえ感じる武勇伝をソーマへ一方的に語って聞かせていた。しかしソーマは、そんなに嫌そうな顔をしていない。コミュニケーションに飢えていたからだろうか。
さて、話が途切れた時、ソーマはこんな事を訊いた。
「なぜ俺なんかに付き纏う？　救世主気取りの連中とつるんでればいいだろ」
するとエリックは、どこか遠くを見つめながらもこう答えた。
「なに、君がこの支部で一番強そうだったからさ。そして僕はそれを華麗に超えてみせる。それだけだ」
エリックが笑顔を浮かべる。この言葉に偽りはないようだ。ソーマも、少し笑う。
「面白ぇ。やれるもんならやってみろ」
拳を突き合わせる2人は、心底楽しそうだった。

『うー……生肉の味って、いつ喰っても慣れないな……』
その頃、オーディンはオウガテイルの肉片や炭の文字が書かれたタイルを食べながら、歩いていた。そして、アナグラの方面を見つめながらこう呟く。

『エリック・デア＝フォーゲルヴァイデ…妹のためにも死ぬなよ…
…』
その後エリックの身に何が起こるかも知らず、呑気に帰ってゆくキキョウであった。

―続く―

（注）雨宮キキョウはあくまでオリジナルキャラクターであり、ゲーム本編には存在しません。あと、「アメノカゴユミ」やオーディンもまた然りです。

第3話　男神と女神と御曹司と（後書き）

ちょっと遅れちゃった……俺がふがいないばかりに……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6919w/

GOD EATER BURST　-Is he Man, God or Monster?-

2012年1月1日01時46分発行